

ドイツの森のようちえん活動の実際

—Waldkindergarten Bensheim e. V. を訪問して—

A visit report of a “Waldkindergarten” in Germany
—An Analysis of Visiting Records of Waldkindergarten Bensheim e. V. —

水谷亜由美*・今村光章**

MIZUTANI Ayumi and IMAMURA Mitsuyuki

(※岐阜大学大学院教育学研究科・**岐阜大学教育学部家政教育講座)

はじめに

昨今、日本においては、年間を通して森などの自然のなかで過ごす保育スタイルである「森のようちえん」活動が脚光を浴びている。2005年には、第1回の森のようちえん全国交流フォーラムが開かれ、「森のようちえん」活動を行なっている人々が集まり、情報交換などが行われた。2010年の清里での第6回の「森のようちえんフォーラム」にも、約450名もの関係者らが集っている。いま、森のようちえんは日本にも確実に根をおろしつつあると言えるだろう。

それでも、まだまだ広く一般的に認知されているとは言えず、市民権を得るまでにはやや長い道のりがあることが予見される。

ところが、その発祥の地であるドイツでは「森のようちえん」は広く認知されている保育のスタイルである。百合草禎二の調査によれば、2002年段階で、「森のようちえん」標榜する園は385園あり、この5年間でますます広く浸透し、爆発的に増えているという(百合草 2002)。

日本でも、「森のようちえんフォーラム」の情報によれば、約70園もの「森のようちえん」がある。また、韓国や中国、東南アジアにも広がりにつつあるという。

もちろん、何を「森のようちえん」と把握するかによって、その数も異なってくる。定義づ

けの本格的な検討は次の課題とすることにして、ひとまず本論文では、「森のようちえん」活動とは、「幼児を対象に、年間を通じて、定期的に自然豊かな森などで実践する保育活動」と理解するととどめておこう。

さて、このように日本国内においても、また世界においても広がりを見せる「森のようちえん」活動であるが、研究者レベルの先行研究や調査はごくわずかである。たとえば、前述の百合草の調査研究に加えて、東方真理子が、2004年に「ドイツの『森の幼稚園』の実態に関する調査研究」(東方 2004)、および、2005年に「幼児期における自然とかわるの意味：『森の幼稚園』の教育と『環境教育』」(東方 2005)において、ドイツの「森のようちえん」を紹介した報告はあるが、ドイツの「森のようちえん」の内実については、日本ではほとんど紹介されていないといっても過言ではない。

もちろん、1999年に海外の「森のようちえん」の様子を紹介する写真集(石亀, 1999)が出版されたり、その活動内容を紹介する子ども向けのお話(今泉ら, 2003)が出版されていた。また、2007年には、ドイツにおいて、ミクリッツ(Ingrid Miklitz)の『森のようちえん』(Miklitz 2007)と題された書物が出版され、一般的な紹介がまとめられている。2009年には、ヘフナー(Peter Häfner)の『ドイツの自然・

森の幼稚園：就学前教育における正規の幼稚園の代替物』と題された博士論文が日本でも翻訳出版され、森のようちえんの教育的意義についての見解を日本語で読むことができるようになった（ヘフナー 2009）。

2010年には、小西貴士が写真集『子どもと森へ出かけてみれば』（小西 2010）を出版した。この写真集では、森のようちえんの活動を視覚的に楽しむことができる。小西はブログや写真展などで確実に森のようちえんの認知度を高めている。

このように、たしかに、徐々に森のようちえん活動は紹介される機会は増えているとも言えるだろう。だが、日本でドイツの森のようちえんを本格的に紹介した先行研究が数少ないことに変わりはない。幼児期の環境教育という分野で見ると、幼児対象の野外教育活動を紹介した文献はあるものの、森のようちえんに焦点をあてた報告は皆無である。

しかしながら、岐阜大学においては、幸いにも、2010年3月に応用生物科学部の修士課程を修了した井本萌が「ドイツの森林における空間および自然資源利用としての『森のようちえん』の評価」（井本 2010）を修士論文として提出しており、ドイツの森のようちえんの様子を少し垣間見ることができる。ただ、残念ながら、井本の修士論文は、ドイツの森林利用に焦点があてられており、ドイツの森のようちえん活動をつぶさに報告する論文ではない。

そこで、この井本の先行研究を踏まえたうえで、本稿では、ドイツの森のようちえんの様子を詳細に描写したい。すなわち、本稿の目的は、ドイツのベンスハイム（Bensheim）に位置する「森のようちえん（Waldkindergarten）」である「森のようちえん ベンスハイム（Waldkindergarten Bensheim e. V.）」において、直接に教育実践にかかわり、観察したことを詳細に報告するとともに、そこでの指導者たちへのインタビューから、「森のようちえん ベンスハイム」の理念や教育の方法と内容、および魅力について若干の考察を加えることにある。

具体的には、第一著者である水谷が、4日間という短期間ではあったが、実際に幼児と森の

ようちえん活動を共にしたことを詳述し、活動の内容や観察した幼児の姿を通して、森のようちえんの特徴やそこで大切にされている理念について検討する。なお、本報告は、水谷が体験した内容の原稿に、共著者の今村と協議を重ねて共に加筆修正を加えたものである。

もとより、ドイツと日本では、風土的にも文化的にも異なる背景がある。そのためドイツの森のようちえんのやり方をそのまま日本に適用することはできない。だが、ドイツでの森のようちえんの実践を体験し、報告することにより、「森のようちえん」の保育の理念や活動の意義が見えてくるとも言える。ドイツの森のようちえんはどのような活動を行っているのか。森のようちえんで大切にされていることは何か。広まりを見せる森のようちえんには、どのような魅力があるのだろうか。それらのことについて明らかにしたい。

本稿では、まず「森のようちえん ベンスハイム」の概要を説明し（第1節）、次に、4日間にわたる森のようちえんの観察記録を述べる（第2節）、また、森のようちえんの保育者や保護者へのインタビューをもとにし、森のようちえんの教育理念と方法、森のようちえんの意義について考えを深めていきたい（第3節）。最後に、森のようちえんについて考察を述べる。

短い期間の訪問ではあったが、筆者らにとっては学ぶところが多かった訪問である。こうした報告が、今後、日本の森のようちえんの発展の布石としたい。わずかながらでも役立てられることを願っている。

第1節 Waldkindergarten Bensheim e. V. の概要

ミクリッツの研究によれば、ドイツにおける「森のようちえん」の歴史は古く、1968年に正式な幼稚園の認可を受けている。1993年には、フレンスブルグにおいて、ドイツ国家によって初めて認可された「森のようちえん」が開園した。それ以降、「森のようちえん」の考え方は広まりを見せ、一般市民にも認知されてきたという

(Miklitz 2007)。1996年には、全ドイツ森のようちえん連盟 (Bundesarbeitskreis der Naturkindergärten in Deutschland) が設立され、2000年には、ドイツ全域での規模となった。

数多くの「森のようちえん」があるが、岐阜大学地域科学部准教授のフォン・フラクシュタイン・アレクサンドラ先生の紹介を受け、第一著者の水谷が訪問したのは、ドイツ連邦共和国ヘッセン州ベルクシュトラーク郡最大の都市、ベンスハイム¹⁾の森のようちえんである。



写真1 パウワーゲンの外観

ベンスハイムは、フランクフルトとハイデルベルクの間、オーデンバルドの西側に位置する。気候は比較的温暖で、ワインづくりが盛んな地域である。

「森のようちえん ベンスハイム」は、1996年につくられた「森のようちえん」である。森の中に、パウワーゲンというコンテナ型の小屋があり、そこが集合場所となっている(写真1)。

園舎はなく、森の中を散歩しながら毎日屋外で過ごす保育形態をとっている。活動は、月曜日から金曜日までの週5日である。9時から13時30分の間、幼児は保育者と友達と共に遊んだり食事をしたりして森の中で過ごしている。

基本的には、「森のようちえん ベンスハイム」の一日のながれは次のようなものである。

<一日のながれ>

9:00 登園

2つのグループに分かれて活動をする。

9:15 朝の会

朝の歌・人形劇、または、知識をつけるゲーム・集団遊びなどを行う。

9:45 フルーツを食べる。

10:00 森へ出発する

リュックサックを背負い、森の入り口で輪になり、出発前の歌を歌う。荷物を持って、森を歩く。

10:20 森での自由遊び

遊びの拠点となる場所に到着するとリュックサックを置く。保育者はシートを敷き、遊び道具を用意する。遊びは時々プログラムされているが、基本的には自由遊びをする。

11:00 朝食

持参したサンドウィッチを食べる。シートを中心に輪になって食べる。互いにパンやお菓子を持ち寄り、分け合いながら食べることもある。

11:30 森での自由遊び

食べ終わった子から遊びを再開する。同じ遊びを続ける子と、違う遊びを始める子もいる。

12:30 移動

保育者の遊び終わりの声掛けにしたがって、荷物をまとめる。リュックサックを背負い、準備が出来たら出発をする。

13:00 帰りの会

森の入り口地点で、帰りの会をする。全員が輪になって座り、一日の振り返りをする。

時間がある時は、集団遊びを行う。

以上が通常の保育の流れであるが、原則的なものであることは言うまでもない。

では次にクラスの状況と保育者について触れておこう。

「森のようちえん ベンスハイム」には、2つのグループ(クラス)がある。どちらのグループも縦割り保育を行っており、3-6歳の幼児集団である。1グループ20名が定員であるが、現在は各グループに特別な支援を要する幼児が所属しているため、19名ずつの構成である。保育

者は全員で9名いるが、各グループに3名ずつ引率して活動を行っている。なお、特別な支援を要する幼児には、一人の保育者が付き添う。

幼児の服装は、基本的に動きやすい服装である。晴れの日には、Tシャツにジーンズをはき、帽子をかぶっていた。気候によって着脱ができるよう、パーカーやジャンパーを着用している幼児が多かった。また、雨の日にはカッパと長靴が欠かせない。雨が心配される日は、朝からカッパを着用し、濡れないように配慮していた。

幼児はリュックサックを背負って登園する。リュックサックには、朝食の果物や野菜、パン、くるみ、水などが入っている。さらに、手をきれいに拭くためのタオルと、座って朝食を食べるためのマットを持ち歩いている(写真2)。



写真2 持参した朝食を食べる様子

第2節 Waldkindergarten Bensheim e. V. の体験報告

では次に、2010年5月25日から5月28日の4日間の「森のようちえん ベンスハイム」での体験を報告しよう。

体験報告1 2010年5月25日(火)

9:00~13:30

幼児は基本的に自由遊びを行う。保育者は、幼児に遊びの提示や勧誘を行わない。幼児の遊ぶ姿を見守り、幼児らが好きな遊びができるように遊び道具を用意するだけである。本当に危険という場面でなければ、手を出したりはしな

い。それにもかかわらず、幼児は森につくと、何をしようかと考える間もなく遊び始めていた。

幼児は出発前からある種の遊びをすると決めているように思われた。幼児の自主性が重視された教育方針であるからこそ、幼児は意欲的に活動を展開していく(写真3)。



写真3 木をハンマーでたたいて遊ぶ様子

特筆すべきことは、森での活動のルールが徹底されていたことである。たとえば、先頭集団は、ポイントとなる道や分岐点に出ると必ずそこから先へは行かない。散歩型の保育では、集団の輪から外れることは危険を生むことにつながる。そのため、集団のルールを守ることが重視されるが、そのルールを守りながら、我慢することや他者を思いやることも教わっていく。

子どもたちは、自然界で生活するためのルールについてもよく理解している。森の中にガラスが落ちてると、幼児は積極的に拾い始める。「森の中に土に返らないものは捨てておいてはいけない」ということを、日々の生活の中で学んでいる。保育者が日々幼児に伝え、保育者自身が率先して行っているからこそ、こうした姿がみられると考えられる。保育者自らが、他者を大切にする姿を示し、動物や植物のことを考えた発言や行為をすることによって、幼児は自然と様々なことを学ぶ。

ドイツの森は、人々にとって身近な場所である。大人も子どもたちも気軽に立ち入ることができ、そこでいろんな体験をしている。森のようちえんは、森で遊びこむことを大切にしながら、そこで生活をする他者の存在を知り、ルー

ルを守ることの必要性を実感していく場となっている。

体験報告 2 2010年5月26日(水)

9:00~12:30

登園時は曇り空であったが、遊んでいるうちに一気に黒い雲が空を覆い、雨が降り出した。最初はパラパラと降っていた雨であったが、時折ザーと強い雨が降ってきた。

だが、幼児の行動はそれまでと変わらない。晴れている時と同じように幼児は遊び、保育者はそれを見守っている。ハンモックに乗って揺られていたり、土を掘って泥遊びをしたり、ビーズを糸に通してネックレスを作っていた(写真4)。

雨の中でどのような活動をするのだろうと注目していたが、晴れの日と同じように遊んでいる姿に驚かされた。森のようちえんで過ごす幼児にとって、雨の中で遊ぶことは日常的なことである。カップさえ着用していれば、十分に活動は展開できるし、幼児は遊びを楽しむことができる。

また、危険だからと言って刃物や金づちなどの道具を排除したりはしない。幼児は糸のこぎりやナイフを器用に使い、木を切り、金づちとハンマーを使って、丸太をたたいて遊んでいた。道具を使う幼児の表情は真剣そのものである。周りに気をとられることなく、手先をじっと見つめて作業をしていた。時折、どのように動かしたらうまく切れるのかと試行錯誤している姿も見られた。幼児は道具の扱い方も、危険性もよく認識している。保育者や年長の幼児から教わったのではないかと思われる。そして、よりうまく活用する方法を自分で考え、試してみる力も幼児には身につけている。

一般に、危険な刃物は、幼児を守ろうとするあまり、排除してしまう傾向にある。けれども、幼児から嫌だと思ふ面や危険な面を全て取り去ってしまえば幼児のためにはならない。雨に濡れてかぜをひくこと、刃物で怪我をする可能性もあるが、その経験も幼児にとって大切な経験である。森のようちえんでは、多くの経験を幼児に提供しているということが分かった。



写真4 雨の中、ハンモックに揺られる様子

体験報告 3 2010年5月27日(木)

9:00~13:30

この日は、コンテナ近くの敷地に滞在したまま過ごした。移動がなく一定の場所で遊ぶと、遊ぶ時間がたっぷりととれる。幼児はじっくりと遊びこむことができた。

コンテナの周りには幼稚園のガーデンがある。そこでは、食用、薬用のハーブやラベンダーなどの植物が栽培されている。幼児は自由にそこに出入りができ、水をやったり、草花を摘んだりして遊んでいた。

周りの幼児も、葉っぱを手にとってはにおいを嗅ぎ、笑ったり、顔をしかめたりしていた。幼児にとって、植物はとても身近な存在である。保育者に名前や何に使うのか確認しながら、自分だけの事典を作っていた(写真5)。幼児は、葉っぱの形とにおいて植物を認識し、事典を作ることで名前と活用方法を覚えていく。自分で摘んできて、事典にまとめる作業により、ただの草花から自分の生活に役立つ特別な草花、自分のお気に入りの草花に変わっていく。



写真5 自分だけの植物事典づくりの様子



写真6 絵本を読みきかせる様子

朝の会と帰りの会の時間にも身近な動植物について学ぶ時間が設けられている。毎日のように、草花や動物を直接見ながら、名前や特性、活用方法を学んでいる。ゲームを取り入れて教えているため、幼児は楽しみながら学ぶことができる。「森のようちえん」では、本で見るだけでは分からない情報を一気に得ることができ、体験的に学ぶことができる良さがある。

幼児は、「森のようちえん」で様々な動植物に出会うことができる。それは、直接的な体験であり、五感を使って学んでいくことができる。その出会いを保育者はどのように生かし、幼児の知識と生活につなげていくのか。保育者の働きかけにより、経験はより充実したものになる。

体験報告4 2010年5月28日(金)

9:00~13:30

この日の雨は、4日間の中で最も激しい雨であった。そのため活動は大きな木の下で行われた。大雨が予想されるときは、木の下を拠点にする。木の枝が入り組んでおり、緑の葉っぱで頭上を覆っている木の下は、雨を遮ってくれる。それでも雨をしのげないくらい大雨が降ってきたら、シートを頭上に設置して、雨宿りができるようにしていた。

木の下での活動は、遊ぶことができる範囲は狭く、遊びの種類も少ない。だが、幼児は自分たちでどんどん遊びを創りだしていく。朝の会では絵本を読んだり(写真6)、歌を歌ったり、合奏をしたりと「静」の活動が中心であったが、自由遊びになると一転する。

体を動かすことが大好きな幼児は、雨が降っているにも関わらず、木登りをして楽しんでいった。雨に濡れて木は滑りやすくなっているが、そのような環境の変化は幼児には関係ない。うまくバランスをとりながら登り降りを繰り返していた。木の高い所に登ってしばらく下を眺めていたり、木にしがみついてじっとしたりしている姿は印象的であった。

雨の中、いつもよりもゆったりとした朝食時間を終えたころ、雨は一気に快晴へと変化した。太陽の光が降り注ぎ、小鳥が鳴き始める。幼児は一斉に野原へと飛び出していき、嬉しそうに駆け回っていた。草花を摘んだり、木の幹をハンマーでたたいて遊んだり、晴れていた日と同じ遊びが始められていた。一日の中で、雨が降ったり止んだりを繰り返している。雨が降ってきても、一時的に雨風を木の下でしのぎ、日が照り始めたらすぐに外に出て走り回ることができる。天気は人の力でどうにかできるものではない。その時の天気に合わせてどのように活動を行うのか、森のようちえんの保育者は考え、どのような場合でも対応できるように準備をしている。

第3節 ドイツの森のようちえんから学んだこと

ドイツの森のようちえんから学んだことをまとめよう。まず森について言及したい。

森のようちえんを取り巻く環境は、日本とド

イツでは相違点が多々ある。ドイツの森は、日本の山とは異なり、平らで遠方まで見渡すことができる。急な斜面はなく、凸凹とした道は少ない。そのため、幼児でも気軽に歩くことが出来る。



写真7 高木が並ぶドイツの森

しかも、森に生えている木は、とても高い(写真7)。頭上を覆う木々は、晴の日には強い日差しを遮り、雨の日には冷たい雨のしずくから人々を守ってくれる。ドイツの森を歩いていると、木々に包まれているような感覚を感じた。

加えて、木は真っ直ぐ生えているものばかりではない。木の枝が入り組んでいたり、なだらかなカーブを描いていたりする。したがって、幼児が木登りをすることは容易である。年少の幼児であっても簡単に足や手をかけることができ、近くの木々の枝に捕まりながら上の方まで登っていくことができた。また、1本1本異なる形をしている枝は、幼児の手によってブランコやシーソー、家の一部に変化をすることができ、面白かった。日本で森のようちえん活動をする際にも、木の形状に注目して場所を選択する必要があると考えられる。

ドイツの人々にとって、森は普段の生活の中にも根付いている。緑の多い庭先で遊ぶことが多く、晴れの日には外で食事をするのも珍しくない。家族で森を散歩することもある。ドイツの森のようちえんに通う幼児にとって、森は生活の場となっており、遊ぶのも食事をするのも森の中が当たり前である。

次に天候について言及しておこう。

ドイツの天候は、地元の方が「次はどんな天気になるのか分からない」と言われるほど変化が激しい。先ほどまで晴れていたのに、次第に真っ黒な雲が空を覆い、すぐに雨が降り出す。しばらくすると、ぱたりと雨はやみ、再び青空と太陽が出てくる。天気の変化に対応するため、幼児も保育者も常に雨具の準備をしている。大雨が降ってきたら、すぐにフードをかぶって身を守ったり、シートを木の枝にくくりつけて頭上を覆ったりして、雨宿りが出来るようにしていた(写真8)。日常的に雨に濡れる経験をしている幼児は、濡れても表情一つ変えず、平気で遊びを続けていた。



写真8 雨宿りをしながらお弁当を食べる様子

天候は、人間の力で変えられるものではない。「嫌だ」と思ったり、「雨だから出来ない」と考えるのではなく、「どうしたら活動ができるのか」と天気との付き合い方を幼児は森のようちえんの活動の中で学んでいるように思われた。

以上のようにドイツでは、森や木、天候の変化が日本とは異なっていた。森のようちえんが広く市民権を得ているドイツの森は、人々の身近な場所である。人々は日常的に森の中で散歩や食事をして楽しんでいることが分かった。

さて、こうした森と天気のもとで、森のようちえんで大切にされていることは、幼児の自主性を重んじ、遊びこむことである。

日々の活動を観察していると、保育者は基本的に見守る姿勢をとっている。幼児に遊びを提示したり、口出しをしたりはしない。保育者は、遊び道具を入れたリュックサックとキャリーバッ

グをいつも持ち歩いているが、幼児の要求に沿ってその道具を準備するだけであった。

だからといって、幼児を放置しているのではない。15分おきに幼児の人数を数え、どこで誰が何をしているのか把握している。幼児が何をしていたがっているのか？どうして喧嘩をしているのか？今、何に困っているのか？幼児の姿を見て、理解し、時には一緒に遊び、必要なときにはサポートをしていた。幼児の思いを一番考え、幼児のやりたいことが思い切りできるように環境を設定していることが分かった。

また、幼児は一つの遊びを継続して行うことが分かった。目的地についてからの遊び、ご飯を食べてから帰宅するまでの遊びは、継続していることが多かったのである。

散歩道についても同様である。森を歩くコースはいくつかある。保育者はそのコースから、天候と幼児の意見を聞きながら決めている様子だった。幼児に2, 3の選択肢を提示して決めるのであるが、幼児は気に入った場所へ何度も行こうとする傾向にあると見受けられた。気に入ったコースに決まると歓声をあげて喜んでいた。

次に注意したい点は、「静」の時間の過ごし方についてである。

幼児教育において「静と動」のバランスは重要である。そして、「静」に当てはまる時間は、朝の会と帰りの会の時間だといえる。「森のようちえん ベンスハイム」では、朝の会と帰りの会の時間が大変ゆったりと設けられていたことが印象に残っている。朝の会は、毎日決まったコンテナの近くの場所で行われていた。朝の歌を歌い、手あそび、人形劇やゲームを行う。身近な草花について学ぶ時間も取り入れられていた。この時間だけは保育者が主となっており、幼児の学びへとつなげようとされていると考えられた。一方的な方法ではなく、どれも参加型の活動であった。朝の会において保育者は、森についての知識を深め、森で遊ぶ意欲を掻き立てようとしていると考えられた。



写真9 帰りの会での手遊び

帰りの会は、森への入り口付近で輪になって座って行なわれていた(写真9)。お互いに全員顔が見えるよう、輪になることで一体感も生まれていた。遊びは一人一人自由であるが、この時間だけは同じ場所で同じ話を聞いて分かち合う。

帰りの会では、必ずといっていいほどその日の振り返りを行っていた。「今日はこれを作った」「今日はこの遊びが楽しかった」「こんな発見があった」とみんなで活動の内容を共有していた。

その際、保育者と幼児という関係ではなく、保育者も幼児も対等な立場で出来事を話し、相手の思いを共感しあっているように見えた。人に話をするすることで、自分自身の思いも整理ができる。森のようちえんの一日の終わりに、振り返りを話すことは、大切なことだと実感した。

さらに、保育のなかで大切にしていることに、周囲の人物、生き物、自然物に対して尊敬の念を持つことが挙げられる。

森のようちえんの保育者に「保育者として必要な資質は？」とお尋ねしたところ、「保育者として開かれた心を持ち、周囲の人物、生き物を尊重し、学ぶ姿勢を持つこと」だとお答えいただいた。

森のようちえんの保育者にお話をうかがっている間に、“respect”という言葉を何度も耳にした。森のようちえんでは、自分以外の他者を尊重することが重視されている。自分が生きているのは、周りの恩恵があるからである。自分も他者も、物に対しても敬いの心を持ち、大切にしようとする気持ちを育てたいという願いが、

森のようちえんの根底にあるのではないかと思われた。

幼児は、森の中で自由に遊んでいる。けれども、それは他人のこと、他の動物、植物のことを考慮した上での自由であると分かった。ゴミを拾いながら歩いたり、むやみに草花を採らないようにしたり、サンドイッチを落としてしまった友達にそっと自分の分を差し出す姿からは、互いによりよく生活するための方法を学び、相手を思う気持ちが育ってきていると分析できる。

森の中で過ごしていると、人だけではなく、多くの動物や植物、ものとかかわる機会が生まれる。互いの良い面、悪い面を直接的に体感することができる。その経験を生かし、自分と他者、生き物、ものの全てを尊重し、共に生きていく方法を幼児に伝えていくことが森のようちえんで大切なことであると考えられる。

以上のように、「森のようちえん ベンスハイム」の教育からは、幼児の自主性を重んじること、「静」の時間の重要性、「respect」する心を持つことの大切さを学ぶことが出来た。

ドイツと日本では、「森」という地理的環境も、天候も、生活スタイルも異なる。けれども、森のようちえんにおいて大切にしていること、幼児に伝えたいことには共通点や学ぶべき点が多くある。

とくに、「森のようちえん ベンスハイム」で重視されている「自分にも、他者にも、他の生き物やものに対して尊敬の念を持つ」理念を岐阜での実践で心掛けていきたい。動植物の命を感じる瞬間を大切にしたり、友達とかかわる機会を増やしたり、他者や自然への感謝の気持ちを感じるきっかけを作っていきたいと考えている。

さらに、日本の森の良さは四季があるところだと改めて思った。日本の森の環境を生かし、四季の移り変わりを感じられるような活動の展開を考えていきたい。

結びにかえて

本稿では、ドイツの森のようちえんでの体験を報告するとともに、森のようちえんの教育理念と方法、魅力についても若干の考察を行った。

当然のことながら、ドイツと日本では、森の捉え方や天候などの相違点が見られる。だが、森のようちえんを行う保育者や保護者の願いは共通しているように看取できる。その共通の願いとは、①幼児が五感を使って直接的な自然体験をし、②制限のない空間と時間の中で遊び込んでほしいという願いである。五感を十分に使いながら、思う存分遊び、感情表現をすることは森のようちえんの一番の魅力である。

さらに、ドイツの森のようちえんの保育の体験から学んだことは、「自分、他者、生き物、ものに対して尊敬の念を持つ」ことである。幼児は、広がりのある空間と時間の中で、様々なものに出会い、働きかけ、感じ取ることができる。それは、自分に都合のよいものばかりではない。雨に降られること、虫に刺されること、友達とけんかになることもある。他方で、自分の思いを優先するあまり、花を引きちぎったり、ありをつぶしてしまい、はっとする経験もする。森のようちえんの活動の中で幼児は、自分の周りには数知れない命があり、自然の営みが存在することを知っていく。自分と他者、他の生き物やもの、全てを尊重し、共に生きていく方法を学ぶ場が、森のようちえんであると位置づけられる。

ドイツの森のようちえんで「互いを尊重すること」を重視する理念は、普遍的な理念でもあるだろう。雨や風を直接感じる機会を作る。動植物の命を感じる瞬間を大切にする。それは難しい概念ではない。たとえば、森の中に落ちているゴミについて考える場を設ける。それを実践することで、周りの人や生き物、ものに対する尊敬の念の育ちにもつながる。

今後は、幼児が遊びの中で、自分と身の回りの事物について考え、共に生きるための方法を生み出していくような森のようちえん活動を具体的に実践していきたい。

実際に、岐阜市内で森のようちえん活動を行

う任意団体「ぎふ☆森のようちえん」を主宰し、日々活動する我々にとっては、短い期間の訪問ではあったが、学ぶところが極めて多かった。こうした報告が、今後、日本の森のようちえんの発展の布石としたい。わずかながらでも役立てられることを願っている。

<謝辞>

ドイツへの渡航と「森のようちえん ベンスハイム」のご紹介、宿泊先の手配に至るまで、岐阜大学地域科学部准教授 フォン・フラクシュタイン アレクサンドラ先生には大変お世話になりました。フラクシュタイン先生の懇切丁寧なご指導とご厚意がなければ、このような貴重な体験をし、それを報告にまとめることはできませんでした。ここに記して厚く御礼申しあげます。

<註>

1) ベンスハイム市のWeb

<http://www.bensheim.de/web/index.cfm>

Waldkindergarten Bensheim e. V. のWeb

<http://www.waldkindergarten-bensheim.de/>

<引用文献・参考文献>

- ・石亀泰郎, 1999, 『さあ 森のようちえんへ: 小鳥も虫も枯れ枝もみんな友だち』, ぱるす出版。
- ・今泉みね子, アンネッテ・マイザー, 2003, 『森の幼稚園: シュテルンバルトがくれたすてきなお話』, 合同出版。
- ・井本萌, 2010, 「ドイツの森林における空間および自然資源利用としての『森のようちえん』の評価」, 岐阜大学応用生物科学研究科修士論文, 2-45頁。
- ・東方真理子, 2004, 「ドイツの『森の幼稚園』の実態に関する調査研究」, 恵泉アカデミア 9, 124-96頁。
- ・東方真理子, 2005, 「幼児期における自然とかわるることの意味: 『森の幼稚園』の教育と『環境教育』」, 恵泉アカデミア 10, 86-107頁。
- ・ペーター・ヘフナー (佐藤竺訳), 2009, 『ドイツの自然・森の幼稚園: 就学前教育における正規の

幼稚園の代替物』, 公人社。

- ・Miklitz, I, 2007, Der Waldkindergarten: Dimensionen eines padagogischen Ansatzes, (3. Aufl.) Scriptor Verlag, GERMANY.
- ・百合草禎二, 2002, 「ドイツの『森の幼稚園』の実践と子どもの発達-森の中で育つ子ども-」, 常葉学園短期大学紀要 (33), 135-165頁。

<付記>

本研究報告は、平成21年度岐阜大学活性化経費(地域連携:一般)「幼児を対象とした環境教育活動「森のようちえん」事業の指導者養成カリキュラムの開発-市民と学生と協同して-」による、地域連携、および、研究成果の一部である。